

第4回X会議 議事要旨（速報）

- 1 日時 令和6年11月29日(金) 16時15分～18時20分
- 2 場所 北九州市役所本庁舎3階 大集会室
- 3 出席者 北九州市長 武内和久、副市長 江口哲郎 片山憲一 大庭千賀子、
顧問 上山信一 山本遼太郎(官民連携ディレクター)
参与 田中江美 ほか

4 概要

◇会議の冒頭、市長から以下の発言があった。

- ・プラチナ市役所プロジェクトでは、いかに市役所が変わっていけるのか、迅速に対応するのか議論したい。
- ・スポーツ振興事業では、これからどういうふうパラダイムシフトし、スポーツが持っている、まちを元気にする力、生活を豊かにする力を発揮していくのか議論したい。

(1) 市政変革の進捗状況について

○集中変革期間全体における現在の進捗状況について、事務局から報告した。

(2) これまでのX会議で指摘された事項と取組状況

○これまでのX会議で指摘された事項とその取組状況について、事務局から報告した。

(3) プラチナ市役所プロジェクト

○第2回X会議において発表したプロジェクトチームからの課題に対し、制度所管局で検討した結果について報告した。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・全120件の課題に対して、97件(8割)の課題が解決に至っている。・課題の解決には検討を要するとされているものは、制度所管局において再度検討し、その結果は今後のX会議で報告する。 |
|---|

○報告後、以下のような意見があった。

- ・8割解決したというのはとても良かった。
- ・×の課題も、本当に解決できないのか、根源にある課題に応えるアプローチはあるかもしれない。抽象化せず考えてほしい。
- ・まだ全然議論が足りないと感じる。システム部門はやる気があるのか。
- ・×の理由が、本当に駄目だとわかる回答になっていない。もう一度よく分析してほしい。
- ・相手の困っている気持ちに寄り添っていない。変革室でもう少しブレークダウンしてナビゲートしてあげてほしい。
- ・今後のフォローは期限を決めて取り組んでほしい。「順次検討」はやめるように。
- ・○についても本当に課題解決に繋がっているのかフォローアップしてほしい。

○事務局報告後、3つの課題について討議を行った。討議では以下のような意見があった。

①週休3日制・フレックスタイム制等

- ・検討の工程をしっかり示すべき。システム改修や条例改正が大変だからというのはやらない理由ではない。
- ・どうすればできるのか、試行的・部分的にできないかという発想に立ってほしい。育児や介護などは切実な声で、今後ますます大きくなる。この声に応える市役所でありたい。まずは部分的な導入をやっていこう。その後どのくらい広げられるのか検討すればいい。

②女性用トイレ

- ・切に気持ちは理解できる。前向きに検討してほしい。一方で、本庁舎自体が老朽化しているので、トイレだけでなく空調など使いづらさがある。庁舎全体の考えを持ちながら、トイレの改修を考える必要がある。
- ・ブースの中に更衣室を設けるなど如何様にも改修できる。働く上でのインフラがどういう状況なのかを見える化して、コストとセットで優先順位の整理が必要。
- ・女性の採用、女性が働く上での切実な声。切迫した問題だと思う。庁舎全体を考えるとということで足を止めず、強力に検討を進めてほしい。
- ・役割分担と、工程を明示し、財政・変革局も予算面について総務市民局としっかり協議をすること。何か所どういう風にやっていくか、画素数を上げてもらいたい。

③災害対応体制

- ・解決策はオールオアサムシングでいい。かつて湯水の際は職員が住所地に近い箇所を対応し、職員が少ないエリアは別チームを作った。過去の事例を見て解決策を考えてほしい。
- ・8月に提案があった後の今、まだ検討のためのデータが揃っていないというのはスピードがない。危機対応なので、スピードは大切。早く駆け付けられるのは非常に大きなメリット。
- ・避難所に近い人が対応するメリットはある。災害対応の時に遠くまで行動するのは危険。
- ・避難所運営に従事した職員の住所地をプロットして濃淡把握するべき。職員数の薄いところをどう対策するのか、指示系統をどうするのかは、ルールを決めさえすればどうにかなる。
- ・住所地に近い職員が対応するルールに変えることで、運営に携われる人の分母が減ってきている他都市事例もある。慎重に話を聞いたうえで検討したい。
- ・災害対応は大きな問題であり、どう最適化すべきか考えてほしい。いつどのように決めるのか、時間軸を区切って強力に検討を進めてほしい。

(4) スポーツ振興事業

○スポーツ振興事業の現状について都市ブランド創造局から説明があった後、拓殖大学松橋崇史教授から「スポーツによるまちづくり」の全国事例の紹介があった。その後、今後の市のスポーツ戦略について都市ブランド創造局から報告があった。

- ・全世代・全競技のニーズに応えるため、全方位から重点化にシフトし、「スポーツで稼ぐ」戦略を明確化。その果実を様々なスポーツ活動に循環させ、スポーツで「まちが成長」の好循環につなげる。
- ・スポーツで稼ぐ戦略を持続可能とするため、スポーツ施設については、公民連携による「公共施設の最適化」に向けて、公共施設のマネジメントの考え方に基づき「利用者目線」で検証する。

○討議では以下のような意見があった。

- ・大都市であればスポーツでまちづくりを行うのは必須。その中で、アーバンスポーツでまちづくりをするのはよいが、アーバンスポーツだけでよいのか。スポーツ行政の全体像の位置づけの中で、なぜアーバンスポーツを行うのか、事業の規模や成果・効果などを明確にし、具体的に論理立てて考える必要がある。
- ・スポーツで稼ぐコアはアリーナでの集客。特定競技への重点化だけでなく投資が必要。
- ・スポーツによるまちづくりには、大会開催、育成、強化の3点が必要。また、その競技のカルチャーとまちの親和性が重要。
- ・アーバンスポーツを一過性のイベント運営にとどまらず、従来のスポーツの枠を超えて、付加価値を加えるチャレンジをしてほしい。
- ・都市部でアーバンスポーツを支援する点では、規制緩和や大会運営ノウハウが北九州市の強み。加えて、スポーツでまちをどうしていきたいかのビジョンを明確にし、共感を得ていくことが成功の秘訣。

(5) 本部長講評

○最後に、本部長である武内市長から以下の講評があった。

- ・プラチナ市役所プロジェクトは、関係局において一生懸命に検討を重ねたと思うが、まだ検討途中のものもあるので、さらに取り組んでいただきたい。
- ・検討の際に、オールオアナッシングという思考や、別の提案もなくすぐに「できません」というのは行政の陥りやすい罠である。部分的な取組みやトライアル&エラーの中でチャレンジしていくことも重要。
- ・スポーツ振興事業は、体系的に整理を進めていただきたい。スポーツを枠の中に閉じ込めるのではなく、街全体を活用することが北九州らしさではないかと思う。スポーツの枠を超えたスポーツを作っていこう。

5 問い合わせ先 市政変革推進室
電話番号 093-582-3170